

ところが彼は、上官を車で送る途中、予想もしないドイツ軍の待ち伏せに遭い、必死に抵抗するもダメ。捕虜となってしまう。連合軍の情報を探るドイツ軍の取調べ。そして拷問。数日後ハート中尉はゲロしてしまった。そのため殺されずに捕虜収容所へ。

<捕虜収容所の中は・・・>

捕虜収容所は満杯状態。収容所のアメリカ人捕虜のボスであるマクナマラ大佐からの尋問を経た後、ハート中尉は一般兵士と同じ小屋に入るようになった。士官小屋に入ることもできなかったわけだ。

そんな時、捕虜収容所周辺に爆撃をかけたアメリカの爆撃機が一機撃墜された。

そのパイロットは、黒人のスコット少尉（テレンス・ハワード）、そして同じく黒人のアーチャー少尉（ヴィセラス・シャノン）。捕虜となったスコットらはハート中尉と同じ小屋に入るようになった。

そこで表面化したのが、スコット少尉、アーチャー少尉たちと、この小屋のリーダー的存在（いわば専業主）だったベッドフォード軍曹（コール・ハウザー）との対立。ベッドフォードは根っからの黒人嫌いで、強い強い人種差別観の持ち主だったのだ。そのためアーチャー少尉は、ベッドフォード軍曹の畏にかかり、ドイツ軍により処刑。スコット少尉は怒り狂った。

そして事態はさらに進展。ベッドフォード軍曹の死体が発見され、なんとスコット少尉がその犯人として逮捕されたのだ。

<捕虜収容所での裁判の要求>

捕虜収容所の支配者は、ナチスドイツ軍のピッサー大佐（マーセル・ユース）。彼は直ちにスコット少尉の処刑を命ずるが、これに抵抗したのはマクナマラ大佐。マクナマラは裁判の開催を要求し、これを受け入れさせた。そしてマクナマラはスコット少尉の弁護人にハート中尉を指名した。陪審員はすべて捕虜収容所を支配するナチス達だから、裁判は茶番劇であり、スコット少尉の有罪そして死刑という処罰は見え見えだ。

しかし若き法学徒ハート中尉は、スコット少尉の弁護人としての職責を果たすため、懸命に事実の解明に動き、また法廷で熱弁をふるう。

この映画の『ジャスティス』というタイトルは、ハート中尉が徒手空拳のまま、ひたすら裁判での正義の追求に尽くす姿をあらわしたものだと思う。

しかし、裁判は実は一つの演出（オトリ）だった。実はハート中尉の知らない恐るべき計画が、マクナマラ大佐の指揮の下に着々と進められていたのだ。

<恐るべき脱出計画>

その恐るべき計画とは？それは地下通路を掘り、その通路を通っての脱出計画だ。捕虜

たちの必死の作業により、穴掘り作業は完成に近づいていた。

そして脱出作戦決行日は、裁判の最終日。検察官の論告・求刑と弁護人の最終弁論が終わり、判決が下される日だ。その日に捕虜たちは、全員秩序正しく、地下通路を通って捕虜収容所外へ脱出するのだ。これはすべてマクナマラ大佐の書いた筋書き。つまり裁判はナチスの目をひきつけるためのオトリであり、ハート中尉は体よくその弁護人用の「役者」として利用されたのだ。

このカラクリを知ったハート中尉は、マクナマラ大佐に対して言いようのない怒りの思いを爆発させるが、マクナマラ大佐はあくまで冷静。大目的のために必要な手を着々と打っていった。他方ハート中尉は懸命の事実調査の結果、ベッドフォード殺しの犯人をつきとめ、さらに恐るべき事件の真相を解明した。

さあ、ハート中尉は裁判の最終日、ナチスの陪審員に対しどんな最終弁論を展開するのか・・・？

<私の感想>

前述のように、作品のほとんどが夜の場面だから、スクリーンは全編を通じて暗い。その上、舞台は捕虜収容所の中だけ。そしてテーマは重く、事件の背景も複雑だ。そのためずっと見ていると疲れることは間違いない。

連合軍捕虜たちの捕虜収容所からの大脱出をテーマとした映画にスティーヴ・マックイーンやジェームズ・ガーナー、ジェームズ・コバーンらのハリウッドの大俳優が結集した『大脱走』（1963年）があった。あの映画は本当に面白かった。また音楽もカッコよかった。そしてたしかに大脱走はいったんは「成功」した。しかしこの映画では、大脱走は成功する筈だったが、最後にマクナマラ大佐は命をかけてアメリカ軍将校としての使命を果たし、死んでいく結果に……。スクリーン上では善玉か悪玉かよく分からないマクナマラ大佐が、実は立派なアメリカ軍将校だったことが最後に明らかとなる。

『ジャスティス』というタイトルが実にピッタリの作品だが、疲れること請け合い。しんどいことを覚悟のうえで鑑賞するのがいいだろう。

2002（平成14）年8月16日記